

『南山神学』39号（2016年3月）pp. 19-46.

オペラ・ディ・ナザレ

—十字架につけられたアガペ—

アンジェリーナ・ヴォルペ

Opera di Nàzaret（オペラ・ディ・ナザレ）信徒会（以下：ODN）はジョヴァンニ・リヴァが創立した。ジョヴァンニ・リヴァは、世界のどこかでキリストを生きる人間のコンパニア¹（理想的で活発的な友情）が生まれるのであれば、それは個人の功績ではなく、神から普遍的な教会への贈り物であることを信じていた。

血を流してまでナザレのイエスについて行くなら、愛（アガペ）は可能であるとイエスは証明した。ODN は御摂理によって出会った人々のコンパニアであり、共にイエスについて行き、この世においてアガペの場を作ることを願う。アガペの場所は、愛が活発であり「人間に声をかけ、その人間性のすべてを抱きしめる」ところである²。

ヨハネ・パウロ2世が教えるように、このような歩みは聖霊の働きによるものである。

今日でも、男女信徒の間で多様なカリスマが開花しているのが見られます。これらのカリスマは、個人に与えられるものですが、他の人々と共有することもできます。ですから、人々の間に特別な霊的な親しさを生み出すも

¹ 本稿にコンパニア（イタリア語：compagnia）をそのままにしておくことにした。

² 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅「いつくしみ深い神・Dives in misericordia」（1980年11月30日）3、沢田和夫訳、カトリック中央評議会、1992年、13頁。

のとして、尊く生き生きとしたものとして受け継がれ、いつまでも保たれることになります³。

この小さなコンパニアを始めたジョヴァンニが帰天してから4年が経つ。筆者は2014年7月の日本宣教会において、彼から始まった信徒会と彼の人生について「キリストと兄弟を愛することを教えてくれた友人—ジョヴァンニ・リヴァ(1942~2012年)—」⁴と言う表題で、初めて日本で発表するチャンスが与えられた。本稿は、その時のカトリックやプロテスタントの方々からの質問に基づいて生まれた。神がご自分の救いの計画のために人間を必要としてくださることを、キリスト者とキリスト者ではない人々に証することが本稿の第1の目的である。最初の証人は1999年にODNを認めたヨハネ・パウロ2世とその信徒評議会であると思う⁵。なぜカトリック教会がODNを信頼してくださったのか。その理由を、中心である会則ともっとも本質的なテキスト(未発表ドキュメントを含む)⁶を分析し、ODNの誕生と目的を紹介しつつ考察したい。

1. ODNの誕生と教皇認可

ODNは1960年代前半にレッジョ・エミリア市(北部イタリア)で生まれた。この町に、ミラノ聖心カトリック大学哲学文学部を卒業した若い教師ジョヴァンニ・リヴァが、高等学校で哲学と文学を教えるために赴任した。実に困難な

³ 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告「信徒の召命と使命・Christifideles laici」(1988年12月30日)24, 小田武彦・門脇輝夫訳, カトリック中央評議会, 1991年, 62頁。(以下:「信徒の召命と使命」)。

⁴ A.ヴォルペ「キリストと兄弟を愛することを教えてくれた友人—ジョヴァンニ・リヴァ(1942~2012年)—」『宣教学ジャーナル』第9号, 2015年, 45-67頁。

⁵ 5年の試行期間があった(ad experimentum)。2004年8月15日にODNは正式に認可された。

⁶ 本稿のために未発表ドキュメントも使用した。それらに関して「コピーライト:ODN」, あるいはODNから生まれた協会やNGOのコピーライトの略語で示す。

時代であった。第2バチカン公会議の直後であるが、その精神はイタリアの教会において多くの場合空文に終り、若者はむしろ無神論やマルクス主義、ポピュリズム的イデオロギーに惹かれた時代である。何人かの若者が、武力闘争を選んだ左翼主義集団「赤い旅団」(Brigate rosse)に加わった。

ジョヴァンニはこのような環境で生きる若者に、「イエスこそが本物の革命家であり、偉大な人間性のもち主である。われわれと同じ人間でありながら神的であった。そのため、彼に出会った人々は彼を憎み、あるいは彼を愛した。しかし決して無視はできなかった」⁷と語った。彼はキリスト教を「ナザレのイエスとの出会い」として紹介したのである。理論だけならば人々はいくらでも論じることができよう。同意、不同意を選択できる。しかし、出会いを議論で片づけることはできない。その出来事に対して「はい」か「いいえ」と言う他ない。

若い教師の側に来る若者は、すでに右派か左派の政治的意識があり、あるいは非常に保守的なカトリック教徒であった。しかし、彼らはその出会いを決定的で説得力のある出来事として認め、自分たちに One Way と名付けた。それは自分たちだけが正しく他の人の道は間違っているという意味ではない。キリストの無類の人間性に参加し、彼について行く一途な心を表現したと思う。

1976年に信徒会はそこから始まった。1989年にODNを信徒会として初めて公に認めたのは、メキシコ・シティの枢機卿エルネスト・コッリピオ・イ・アフマダである(メキシコ人司教カルロス・タラヴェーラ・ラミレス師がジョヴァンニをベラクルス州のコアツァコアルコスにある神学校の教師に推薦し、その招きを受け入れて、彼は家族と共に1985年からメキシコに居住していた)⁸。

⁷ ジョヴァンニ・リヴァ著、アンジェリーナ・ヴォルペ訳『イエスを知るために』ドン・ボスコ社、2012年、146頁参照。(以下：『イエスを知るために』)。

⁸ Cf. *Sul Sessantotto, One Way, Reggio Emilia e dintorni. Un'intervista con Giovanni Riva, a cura di A. NESTI, "Religioni e Società", n. 62, sett.-dic. 2008, p.109.* (以下: *Sul Sessantotto*).

後に、ベネズエラ、日本、イタリアの司教たちによって ODN は認められることになる。そして 1999 年 8 月 15 日に教皇庁信徒評議会により ODN はキリスト信者の私的会として認可され、同年の 9 月 25 日、1 日の巡礼の間にローマでその認可式が行われた（巡礼は、すべての行いがキリストへの動きであるという意味を表した）。最初にミサがペトロ座で挙げられた。ODN はキリストの教会の偉大なる木に属している小さな枝であり、木につながっているなら実を結ぶというキリストの警告（ヨハネ 15,5）を会員に意識させるためであった。午後信徒評議会会長フランシス・スタッフォード枢機卿より会長と 40 人の各国の責任者に認可証が渡された。

2. 会則

1999 年 9 月 25 日、認可証と共にスタッフォード枢機卿は次の言葉を会員に贈った。

あなた方の会則に次の言葉があります。「人類の幸せへの愛から決して離れない御父の顔の仲介者であるキリストの現在の顔のあかしとなり、一般的な環境、日常生活、それぞれの職業、それぞれの場と時において、人々の要求の中でキリストと出会うきっかけになることです」（会則 1.4）。

今日、あなたがたの会とその会則に、教会において認可が与えられました。この素朴で親しい儀式を通して、特にあなたがたのために神の愛が現れてきたと思います。[.....] レッジョ・エミア市で生まれ、いくつかの国々に発展したあなたがたのカリスマを、教会はキリスト教的な完成への価値ある歩みとして認め、確かなものにします⁹。

⁹ Opera di Nazaret (Libretto del giorno del riconoscimento), 25 settembre 1999, pp. 18-19. (コピーライト: ODN). (以下: Libretto ric.).

スタッフォード枢機卿が述べた言葉は会則の 1.4 条（目標）からである。以下に続く。

したがって、オペラ・ディ・ナザレトの使徒的行動はすべての環境において行われる。たとえ信仰に関わらずとも、あるいは信仰を拒む環境においても同じである。日常の行動であり、同時に人々の要求に応えたいという行動である。それは第 1 と第 2 の目標である（会則 1.4）。

第 1 の目標は次のように説明される¹⁰。

個人はミッションの精神を持ち、すべての要求と発展性における仕事と日常生活が賢い方法によって影響するように努める。事実このような個人の意識は喜びに溢れるお告げの希望に基づく。「モーゼが律法に記し、預言者が書き記している人に出会った。ヨセフの子、ナザレのイエスという人だ」ヨハネ 1,45（会則 1.4.1）。

これはキリスト者としての役目の集成と言いえる。要するに「すべての心の喜び、すべての期待の成就である」¹¹キリストの顔、すなわちアガベである神の、具体的で現在における顔の証になることである。イエスによる救済の業に協力するキリスト者の第 1 の使命は、福音を生き告げることである。イエスは人間の自由を尊重しながら、人間の自己実現（自分の存在の意義を実現する）に導きたいのである。

¹⁰ 第 2 の目標について後に説明。

¹¹ 「現代世界憲章・Gaudium et spes」（1965 年 12 月 7 日）45、『第 2 パチカン公会議公文書全集』南山大学監修、サンパウロ、1996 年、359 頁。

この良い知らせを全世界の人々に運ぶのは専門家の仕事ではない。むしろすべてのキリスト者の使命である¹²。したがって、キリスト者すべてが日常生活に福音の精神を運び、それが影響するように努めるという使命がある。「信徒に固有の召命は、現世的な働きに従事し、それらを神にしたがって秩序づけながら神の国を追求することである」¹³。「現世的な働き」あるいはODNの会則1.4条に述べられている「一般的な環境、日常生活、それぞれの職業、それぞれの場と時において」働くことは、もっとも根本的な行いである。なぜなら、キリスト者がたびたび二元論的生活を送ってしまうリスクに陥るからである。一方でこの世における生活（家族、仕事、社会的関係、文化・政治的活動）、もう一方で現実から離れた個人の「霊的生活」を送るということはあるまい¹⁴。むしろ、キリスト者はいつでもどこにおいても、実際にキリストに属するものである。「あなたがたは食べるにしる飲むにしる、何をするにしても、すべて神の光栄を現すためにしなさい」（1コリント10:31）。

3. 霊的な計画

しかし、キリスト者がキリストの現存する顔を証するために、欠かすことの出来ない、2つの霊的助けが必要である。それは絶え間ない祈りと養成である。

¹² 「洗礼によるこの共通の尊厳によって、信徒一人ひとは、叙階されたすべての奉仕者と修道者ととともに、教会の使命の共同責任者なのです」（「信徒の召命と使命」、15, 34頁）。第2バチカン公会議は同じことを述べる。「全教会は宣教者であり、福音宣布は神の民の根本的な任務であるから、聖なる教会会議は、すべての人に対して内心の根本的刷新を呼びかける。それは、人々が、福音の宣布に関する自分の責任を痛感して、諸国民への宣教活動に各自の役割を果たすためである」（「教会の宣教活動に関する教令・Ad gentes」（1965年12月7日）35、『第2バチカン公会議公文書全集』前掲書、286頁。

¹³ 「教会憲章・Lumen gentium」（1964年11月21日）31、『第2バチカン公会議公文書全集』前掲書、73頁。（以下：「教会憲章」）。

¹⁴ 「信徒の召命と使命」59, 167頁；会則1.3.2参照。

3. 1. 祈り

祈りとはただ決まり文句を唱えることだけではない（もちろん定型の祈りの言葉も大事である。神の前に立つ人間の立場を総合的に表現するからである）。しかし祈りは御父と深く親しみ、神に属する感謝に溢れる存続的意識である。御父からすべて与えられているからこそ、信頼を持って、神の御摂理にすべてを委ねることができる。

一番良い例は子どもです。子どもは遊びに夢中になっていても、お母さんとお父さんをずっと意識しています。もし一人になってしまい、親が傍にいないと、苦しくてパニックに陥ります。これが求めるということです。神のものであるという意識を持つことです。神に依存し、神から湧き出て、神のものであるという意識です。この意味でキリストは「絶え間なく祈りなさい」と言いました¹⁵。

同時に、祈りはキリストによって存続的に回心が必要であるという意識から生まれ、回心できるように願い続けることである（会則 1.3.1, 1.3.2.参照）。御父が確かにわれわれと全人類に対するご自分の救済の計画を実現して下さるという意識のうちに、信頼をもって願うことである。この願いの謙虚さと感謝（それらも祈りの形である）を持たなければ、「イエス・キリストを理解し、受け入れることをしないでだろう」とジョヴァンニは2009年の四旬節に仲間に手紙を書いた¹⁶。「聖性への養成」¹⁷における祈りの大切さは ODN のすべてのドク

¹⁵ G. RIVA, *Spiritus Creator, esercizi novantacinque*, Spiritus Creator, Roma 2015, p 18. (コピーライト: Spiritus Creator).

¹⁶ Cf. G. RIVA, *Quaresima 2009*, Opera di Nàzaret, Roma - Reggio Emilia 2009. (コピーライト: ODN).

¹⁷ 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡「新千年期の初めに・Novo Millennio Ineunte」（2001年1月6日）32, 貝原敬子訳, カトリック中央評議会, 2002年, 46頁。（以下: 「新千年期の初めに」）。

ユメントにおいて主張される。個人的な祈り（1日少なくとも5分間、神とその御国のために心と知性を尽くし考え、「しばしばミサに参加し、秘跡に近づく」会則 3.1.5）。そして共同体的な祈り（すべてのグループは教会の古い金言「祈りの法は、信仰の法・*lex credendi lex orandi*」¹⁸に従い週1回祈りの会に参加する）である。名古屋にある ODN のグループは週1回共に祈る。しかしすべての参加者が会員というわけではない。また未受洗の人も多い。ODN の生活に参加するにあたり、会則はカトリックの洗礼を条件にしていない。ODN の精神を理解し、尊重することで十分である、としている。

3. 2. 養成

養成は、祈りと同じように霊的生活と日常生活の一致を目指し、キリストの霊に形づけられるためである（会則 1.3.1, 1.3.2 参照）。そのもっとも大切な方法は教理教育である（会則 3.1.3 参照）。聖アンセルムスの言葉「信仰は理性を求める・*Fides quaerens intellectum*」に従い、ODN の会則はいつも信仰の理由を探し、自分に、また他の人に説明できるように会員を招く（「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつも弁明できるように備えていなさい」（1 ペトロ 3,15)）。すなわち、「自分と他の人の人格、そして歴史の実現を求め、その希望を忍耐強くキリストのうちに探求し確認する」（会則 3.1.3）ように勧める。会員は個人、またはグループで、中央議会（Centro）が提案するテーマや教材を勉強する。聖書の選集やカトリック教会教義のテキスト（神学者ジャン・ダニエル、アンリ・ド・リュバックやセレスタン・シャ

¹⁸ 「『祈りの法は、信仰の法』（5世紀の）アクイタニアのプロスペルの表現を用いると「嘆願の法が信仰の法を定める）」というものがあります。すなわち、祈りの法は信仰の法なのです。教会は祈っていることを信じます」（『カトリック教会のカテキズム・*Catechismus Catholicae Ecclesiae*』1124、カトリック中央評議会、2002年、353頁）。

ルリエのテキスト等も含む) 19の他に、『イエスを知るために』と『小さなキリスト教人間学』の2冊が根本である20。その内容を簡潔に見てみよう。

3. 2. 1. 『イエスを知るために』

信仰主義と教条主義はジョヴァンニがもっとも大きな過ちとして判断するものである。信仰主義は理性を無視し、教条主義は自分の先験的で検証のない教義に実在を合わせようとするからである。信仰と理性が矛盾することはない。なぜなら、神はご自分を探求させるために人間に理性を与えたからである。むしろ信仰とは理性の頂点であると言っても良い。理性は神秘を知ろうとする(この試みによって宗教が生まれる)が、人間には限界があり、無限の神秘を自らの力で知ることはできないと分かる。そこで理性は神秘を知るには1つの方法しかないことを認める。それは神秘が自分からわれわれの前に現れることである。次に進めるステップはまじめな考究である。すなわち歴史の出来事において神は本当に話したかどうかを調べなければならない。

したがって啓示について話すなら、それは啓示という「出来事」の意味でなければならない。1846年のピオ9世の回勅 [.....]「クイ・プルリブス」が述べるように、啓示について話すことは神からの啓示という出来事について話すことになる (*divinae revelationis factum*)。例えば、作曲家は自分の交響曲の意図を知っている。それを他人に打ち明けることによって、他の人もその作曲家の望みを理解できる21。

19 特に勧められる文献は J. DANIELOU, *Dio e noi*, One Way, Reggio Emilia, 1996; H. DE LUBAC, *Dio si dimostra nella storia*, Città armoniosa, Reggio Emilia 1978; C. CHARLIER, *La lettura cristiana della bibbia*, Edizioni Paoline, Milano 1979 である。

20 『イエスを知るために』と『小さなキリスト教人間学』は'90年代にジョヴァンニ・リヴァが書いた本である。各国の高校生や学生が対象の講演会記録から生まれた。

21 『イエスを知るために』42-43頁。

これらは歴史的考究である。歴史において自分を神として示した人がいたか。詐欺や瘋癲ではなく、このような驚くような断言をした男が確かに1人いた。それはナザレのイエスである。では神の顔とその啓示を心から求める人間ならば、イエスを知ることは理性的な仕事であると言えよう。イエスの人生とその言葉が、自分とすべての人間の人生のために正しく価値のあるものであるかどうか。言い換えると、イエスを通して神がご自分を現したのなら、その啓示はすべての時代と文化、宗教の人々のためであるはずだ。したがって、調査は正直な意図に基づくべきである。

つまり問題は先にある。どのようなものであろうと最終的な真理、意義、人間と完全に異なる存在、すべての基盤である神に私が身を委ねたいかどうか。最終的な真理を求めたいのか、いや自分の人生に関係あるのか。私の理性と人生の核心は、真理に耳を傾け、真理を求めることであろうか。あるいは私の注意をひくものは他のものなのか。[.....]つまり、私は実際に神を探し求めているか²²。

ジョヴァンニは『イエスを知るために』の本で、イエスの啓示を紹介する前に、理性による分析に53頁もの紙面を割いた。また、最後の13章で結論を出すとき、イエスへの信仰は理性的な理由に基づいていることを説明する²³。も

²² 同上、196頁。

²³ 理性に基づいて発展する課題としての「神の存在」に、若者はいつも深い興味を示す。一例として、2015年秋学期に筆者が南山大学で担当した「キリスト教概論」の小レポートを紹介する(テキストとして『イエスを知るために』を使用)。

1) 「日本人の多くは、神を信じるか、信じないこととらえている。よって、理性によるプロセスを省いていると思う。また、神が存在しているかに対して、理性を用いて理解していること、それは宗教を信仰する、しないという問題だけではなく、様々なことに通じると思う。我々は理性を持っているからこそ、その理性に従い、心に記された倫理があるからと思う」。(2年生、2015年10月16日)。

2) 「自分は母から生まれているが、そのもつと遡ったもの物はどうやって生みだされたのだろう。まず自分たちが作ったわけではないのに、どうして水や空気、食べ物がある

もちろん、信仰は「神から授かる超自然的恵みである」²⁴が、その贈り物を受け入れるのはわれわれの自由な意志である。「信仰は自由でリスクのある選択を要求する。『イエス』か『ノー』を自由に選択できなければ、信仰は信仰ではなくなるからである」²⁵。

3. 2. 2. 『小さなキリスト教人間学』

テキストとして『小さなキリスト教人間学』も使う。この本は『イエスを知るために』の後に出版されたが、テーマとしてはその前にくる²⁶。先に述べたように、さまざまな国と文化、宗教に属する若者（自分を「無神論者」と呼ぶ者も含めて）との会話から生まれた本である。ジョヴァンニは日本人の若者とも25年間の交流があった。この若者たちは日本文化の根本的道徳律（例えば自然を愛すること、人をもてなすこと、調和を求めること）を大事にしているが、彼らに宗教的背景はほとんどなく、むしろ「宗教づいている」話しに決して耳を貸さない。彼らはしばしばジョヴァンニに「どうして神を求めなければなら

んだろう。そもそも、私たちが何か聖なるものに作られたとしたら、何の為に生かされているのだらう。聖なるものは、なぜ私たちを作ったのだらうと沢山の疑問が出てきて考えるのをいつも放棄していました」。(2年生, 2015年10月16日)。

3) 神が存在するかどうかは信仰によるものではなく理性を使うものである。私は今まで神がないものであると思っていた。しかし人類に共通する唯一の道具である理性によって求めるべきであるので、信仰や宗教に属するという理由によって答えを決めることでないといふのももしかしたら、私は神が存在してもおかしくないと思った」。(2年生, 2015年10月16日)。

4) 啓示は、人間の理屈や想像から生まれるものではなく、現実的で知性が求める出来事であり、理性によって行われた分析の結果である。私もこれから自分を観察し、神を信じることだけではなく、さらに次の一歩を進めようと思った。それが「啓示」を待ち願うことであると思ったから。「啓示の仮説は理性の頂点である」という箇所に関するレポートより) (2年生, 2015年12月3日)。

²⁴ 『カトリック教会のカテキズム』153, 前掲書, 50頁。

²⁵ 『イエスを知るために』, 197頁。

²⁶ イタリア語のタイトルは“Piccola antropologia” (小さな人間学) であるが、日本では『小さなキリスト教人間学』とした。(ジョヴァンニ・リヴァ著, アンジェラ・ヴォルペ訳『小さなキリスト教人間学』ドン・ボスコ社, 2001年。(以下: 『小さなキリスト教人間学』)。

ないのですか。私は求めていません」と話していた。しかしこう言いながらも彼らが「ジョヴァンニ先生」と呼んでいたこの中年の外国人と、信じていない神について何時間も話し合っていた。

彼は「キリスト教という課題に接することは困難である」という自覚から話を始める。なぜなら、キリスト教はまず概念ではなく、今日も生きている経験であるからだ。したがってキリスト教を知りたければ、その経験をするしかないだろう（「来なさい。そうすれば分かる」ヨハネ 1,39）。そして、もう1つは（キリスト者にも責任があるが）、現実的で誠実な接し方を妨げる偏見のためである。「勉強は願いである」。しかし、何かを知りたいと願うなら、その課題をすでに知っていると思ってはならない。実際、それはもう知っていると思うなら新しいことは学べない、とジョヴァンニは序論で読者に警告する²⁷。

方法論を紹介する序論の次に、「神」という言葉の難しい問題を紹介し、同時にさまざまな宗教のさまざまな神々と、アブラハムの神との本質的な違いを説明する。

第3部はキリスト教人間学のテーマについてである。この人間学の仇敵は神秘の探求を妨げる「権力」である。権力、すなわち不正と専断的な人間関係によって成り立つ制度は個人の存在の意義を探索人間を恐れるからである。

そして人間そのものが分析される。人間とは、さまざまなイデオロギーの抽象的な対象ではなく、私とあなたのような肉で成り、女から生まれ、自己実現を追求し、つまり *capax dei*、神と結ばれることが可能な生き物である。

テキストの最後にジョヴァンニはやっと、惨めさと偉大さの総合である人間の神秘を決定的に解決できる仮説（この仮説は『イエスを知るために』によって発展する）として、イエスの人間的な経験を切り出す。

²⁷ 『小さなキリスト教人間学』，12-13 頁参照。

ODN の会員はいつも個人的にまた一緒に勉強することを勧められる。日常生活の課題や問題はすべて、「なぜ生きているか」という根本的な問いかけをもって判断すべきであるからだ。したがって養成の過程において、『イエスを知るために』と『小さなキリスト教人間学』は「課題の核心」に戻してくれるテキストとして大変重要である。

人間が正直に真理を探求し、本気で自分を理解したければ、つまり「課題の核心」を意識すれば、出会ったナザレのイエスの中に、その答えの可能性を調べるだろう。事実、イエスは人間に「自分の人間性の偉大さと尊厳と本来の価値を見出す」方である²⁸。ヨハネ・パウロ 2 世のこの言葉は、キリスト者ではない人々のためだけに書いたとは思えない。むしろ、自分をキリスト者だと言うわれわれこそ、キリストとの出会いが人生の決定的ですべてを含む出来事として改めて意識する必要があることを思い出すためであると思う。初めてジョヴァンニに会った学生時代、筆者はカトリック教徒として幼いころから教会に通っていたので、教義をよく知っているとと思っていた。しかし「イエスはある道徳や宗教の創立者ではなかった。彼は 1 つの理想に人生をささげ、満ちた人間性を実現した人間の印象を与えた」²⁹という言葉聞いて、非常に惹かれた覚えがある。若者は宗教的行事を紹介されても興味が湧かないが、「満ちた人間性」と言われるとカトリックであろうがなかろうが、このイエスという神秘的な男を探りたくなるからだと思う。

ジョヴァンニは教育者として、特にキリスト教の伝統に属さない若者に「キリスト教」の話せず、必ずイエスから話を始めた。そして「聖書学」の話せず「人間学」の話をした³⁰。

²⁸ 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅「人間のあがない主・Redemptor Hominis」（1979年3月4日）10、里脇浅次郎訳、カトリック中央評議会、1997年、24頁参照。

²⁹ 『イエスを知るために』、134-135頁。

³⁰ 現代の宣教的アプローチについて、2015年の宣教学会で本田哲郎師は次のように述べた。「福音を告げ知らせることが宣教であるのに、キリスト教を宣伝することが宣教だと勘

4. 指示

「指示」の序論に、祈りと養成の他、従順、アガペと清貧への努めも強調される。これらは福音的な勧告であり、聖性への道を示す³¹。

4. 1. 従順

従順はキリストを愛することから生まれるものである。そして教会と歴史におけるこの独特で「小さな群れ」であるオペラ・ディ・ナザレのものとしての意識を持たせ、キリストについて行く助けである（会則 3.1.1）。

従順への呼びかけの責任は“Centro”と呼ばれる 11 人の中央議会にある。中央議会の中から投票により会長が選ばれる。ODN が存在する各国の地方責任者は“Centro”と会長によって選出される。

従順は受肉のメソッドである。つまり、ある出会いに従わなければ（ついて行くと言った方がよいだろう）われわれは無節操な自分の気持ちとアイディアに従ってしまう。あるいは信仰の中身を忘れて習慣としてのキリスト教を守るというリスクに陥ってしまう。これは特に伝統的キリスト教国のキリスト者の問題である。つまりキリスト教に属する理由は、ただ良心的咎め（伝統から離れたくない）だけを感じるというリスクである。

従順は愛を理由にする。神の愛はある友情を通してわれわれに会いに来る。それを真摯な心で確認するなら、その友情は、自分の人生の真実を得たいという自己実現の希望への答えになれるだろう。自由な意志を持ち具体的な歩みについて行きながら、神のものとして生きる助けになる友情だからだ。

違いしていなかっただろうか」。(本田哲郎「私たちは何を宣教するか」, 日本宣教会における基調講演, 2015年7月4日)。

³¹「教会憲章」42, 82頁参照。ODNの中に、キリストだけに献身し、神の御国のために完全な貞潔を生きる未婚のグループ (Spiritus Creator) が存在する (会則 2.2.2 参照)。

神の家で奴隷は自由である。なぜなら奴隷であることに強要されず、愛のために自分が選ぶ状況であると聖アウグスティヌスは教えた³²。1993年に「聖霊の業：コンパニア」の中でジョヴァンニは次のように書いた：

特別な行いや計画を実現する必要はありません。必要なのは普通の態度です。それはナザレのイエスのように従順であることです。「2人にしたがって生活された」（ルカ 2,51）。どのような時にもすべてにおいて、知恵と心を尽くして、ついて行くことです。それだけです。知恵と心を尽くしてついていくということは、イエスがあなたを見るように自分を見ることです。イエスがあなたのことを考えるように、あなたも自分のことを考えることです。イエスはどのようにあなたの人生に触れましたか。その出会いの時の言葉と行いを意識することです。[.....] コンパニアは秘跡のようにあなたにイエスを運びます。ついて行くことは、すべてを [.....] あなただけのものにせず、より偉大な現実のものとして扱うことです³³。

キリストとその教会への従順は、ODNの創立者自身が大事にし、実践したと思う。彼は自分を「創立者」と呼んだことは一度もなかった（ODN初代会長は友人のロリス・カヴァレッティである）。1999年9月25日、スタッフボード枢機卿への挨拶でジョヴァンニは次のように述べた。

オペラ・ディ・ナザレというこの小さなコンパニアのアドバイザーと先駆者であった方々がたくさんいました。その中から先生であり友人であり慰めであるパオロ・ベルトリ枢機卿さまを特に述べたいと思います。このコ

³² Cf. SANT'AGOSTINO, *Esposizione sul Salmo 99, 7*, in: *Esposizioni sui salmi*, III/1, a cura di T. MARIUCCI, V. TARULLI, Città Nuova Editrice, Roma 1993 p. 460.

³³ *L'opera dello Spirito, la compagnia, The Great Company*, 19 settembre 1993, p. 65. (コピーライト: ODN).

ンパニアの本当の創立者は亡くなった何人かの司祭と信徒です。[.....]私は彼らと出会い愛したものです。40年前から、この私の欠点にもかかわらず、私の中にキリストの宣教の種を植え付けてくれました。彼らは確かに今日を見たかったですよ³⁴。

教皇認可の申請は、当時のメキシコバチカン大使ジローラモ・プリジーネ大司教³⁵の進言によるものであった。ある年の夏、イタリアのアルプスでジョヴァンニと何人かの仲間がお茶をしているときに、プリジオーネ大司教が「あなたが死んだら、この人たちはどうなりますか。教皇様に認可を頼みなさい」と提案された。ジョヴァンニは教会の代表者の言葉を軽く与ることは一度もなかったが、自分にその名誉をいただく価値があるのかどうか大変悩んだ。しばらくの間考え、祈り、親しい仲間に相談した後、その指示に従うことにした。ODNの象徴としてアンジェリコの嘲られたキリストの顔を選んだ。弟子に見捨てられ、民衆に裏切られ、つばをかけられ、頬を平手打ちされたキリスト像である。その後、2009年の待降節に友人に次の手紙を書いた。

このキリストのイメージは伝統的なものですが、その意味を考え直すべきであると思います。西洋世界は、過去にこのイメージを冒濫的に剣として使うための都合のいい解釈をしたからです。今日もまた、イデオロギーの武器として、あるいは権力の支えとして利用されています。しかしこれは十字架につけられたあの若い男、イエスです。全能の神ではなく、敗北者のイメージです³⁶。

³⁴ Libretto ric., p. 32.

³⁵ プリジオーネ大司教は1978年にメキシコのバチカン大使に任命され、メキシコの憲法改正にも関わった。特に信教の自由を認めた130条は彼の働きによって決定されたものである。

³⁶ Lettera di avvento agli Associati, Opera di Nàzaret, dicembre 2009. (コピーライト: ODN).

この嘲られたキリストの顔を愛し、謙遜のうちに彼について行くことを、われわれが忘れないために選んだのであろう。そして聖庁に公式に登録した「オペラ・ディ・ナザレ」という名前もこのような現実的な態度である謙遜を思い出させるためであった。

キリスト者は根拠のない自信をもっているわけではない。キリスト者は、自分が良いものではないことを最初から知っている。同時に非常に弱い自分の力に基づくことができないことも知っている。むしろ、われわれはキリストに対する自分の無能さと不釣り合いをよく意識している。しかし1つの確信がある。それはキリストが働き、われわれを回心させ、われわれと現実のうちにご自分の業を建設していることだ。隠れていた30年間の彼の生活とナザレの家を見ると、われわれの今日の生活との類似点を見つけることができる。ナザレの業（オペラ）は謙遜の業である。われわれは自分の無力さを認めながら、キリストによって奇跡がすでに行われていることを確信している³⁷。

4. 2. アガペ

オペラ・ディ・ナザレの本質は、御父の創造の行い、御子との分かち合い、ものごとを新しくする聖霊の行いである三位一体のアガペそのものである。したがって、オペラ・ディ・ナザレに参加するものは、このようなアガペのうちに自分を存在させる（会則 3.1.2）。

³⁷ G. RIVA, *Per un'opera sociale e politica*, Edizioni "Gli Altri", Reggio Emilia 1995, p. 3. (コピーライト: Centro culturale "Gli Altri"). (以下: *Per un'opera*).

アガペは会則の「指示」のセクションに記されている。なぜ「指示」であるのか。よく考えてみると、イエスは互いに愛するように、招いたのではなくそれを命じた（ヨハネ 4,10）。

愛の命令を自由に受け入れる個人は、キリストのうちに具体的に教育され、回心させてくださるように働く。その「仕事」は神の神秘が出会わせてくださった人間的で霊的なコンパニアを通して具体的に行われる。このようなコンパニアの精気は自分の主と同じ十字架のアガペである。すなわち自分の好みや計画を捨てて、献身的な無償の兄弟愛（愛はキリストによって形になり、可能になった）と赦し合いという存続的な業のために命をかけることである。キリストの眼差しを持って人間を見る試みをするキリスト者は「人間に対して次々と現れるさまざまな論理に従わず、イエスが人々を預かったように、同じ方法で人々を預かるアガペの場を作る」³⁸。アガペにおいて個人的に、また共同体として回心することは、必ず人々の要求に関心を持たせる。他人の問題を分かち合い、そしてできる限り活発に社会的な物質・精神的な慈悲の業の試みを生み出す（会則 1.4.2:「第2の目標」参照）。

他者の問題や要求への関心は大変重要な局面である。特に若者の教育においては欠かすことができないと思う。ODN の精神を知りたい若者には必ず「コンディヴィシオーネ（分かち合い）」が提案される。老人ホーム、孤児院、障害者施設などの訪問であるが、これらの活動目的は、人生の崇高なるおきてを覚えるためである。それは、イエスが実践した愛のおきて、自分自身をすすんで人に与えることを学ぶためである³⁹。

³⁸ 『小さなキリスト教人間学』，134 頁。

³⁹ Cf. *Il senso della condivisione*, The Great Company, Roma 2014, p. 4. (コピーライト: ODN).
ベネディクト 16 世はこの教育の特徴について次のように教えている。「この学びやの中で青年は、人と連帯することを教えられるとともに、ただ物質の支援を行うだけではなく、自分自身を進んで人に与えることを学ぶのです」（ベネディクト十六世回勅「神は愛 DEUS CARITAS EST」(2006 年 4 月 23 日) 30, カトリック中央協議会, 2006 年, 61 頁)。

4. 2. 1. 慈悲の業

精神的物質的な慈悲の業において、ODN が活動する優先的フィールドは政治、連帯と文化である。

4. 2. 1. 1. 政治

ODN の会員は信徒会に責任を負わせることなく、人々の中の正当な共生を目指し、1990年代に生まれた Pane, Pace e Lavoro (PPL) 協会を通して社会・政治活動を進めているが、これは政党活動ではない。教会の社会教説に従い“Polis”, すなわち社会の善を存続的に促進するものである。1995年のPPLのドキュメントは、ヨハネ・パウロ2世の言葉に基づいて結論を出したことは偶然ではない。「信徒は『公共生活』への参加を放棄することは絶対にできません。公共生活とは、組織的にまた制度的に共通善を促進することを目的としている経済、社会、法律、行政、文化上の多様な分野を意味しています」⁴⁰。

PPLが協会として成立する以前の1960年代、ODNの若者は(先に述べたが、当時ODNの名前はまだ存在していなかった。若者はこの運動をOne Wayと呼んでいた)アフリカのビアフラ戦争による犠牲者への支援金を呼びかけた。彼らは発展途上国に対する先進国の罪深い無関心を訴えた先駆者であった。スペインのフランコ将軍が多くのカトリック信徒に支持された時代に、彼らは遠慮なくその無慈悲な独裁政権を非難した。そして1969年4月、イタリアの貧困地域カンパーニア州パッティパリア市でリストラされた労働者のデモに警察が攻撃し死者が出た時も、やはり彼らが事件を告発した。

またキリスト教徒の運動においては、反キリスト教的マルクス主義の若者と会話する試みをした数少ないグループの1つでもあった。そのイデオロギーに陥り、何人かの若者が1970年から1980年代にかけて、テロ組織Brigate Rosse

⁴⁰ 「信徒の召命と使命」42, 114-115頁。Cf. *Per un'opera*, p. 24.

に参加した。その危険な時代に、One Way は若い人々に対してより平和的な革命を絶えまなく提案し続けた⁴¹。

近年のPPLは、さまざまなイベントやパブリックディベートによって移民と難民、人権保証（仕事の権利、若者が対象の職業訓練講座の開講。また教育を受ける権利のための活動）、環境保全などのために働いている。存続的な根本課題は、先進国と呼ばれる国々の経済利益を目的とする戦争や紛争の告発である。先進国は、生活基準を守るために地球のすみずみに貧困や不安を起こしているにもかかわらず、その悲劇的な状況を「不可逆的」と平気で呼ぶ⁴²。

しかし、PPLの活動目的は不正の告発に終わらない。不正を告発することはもちろん必要であるが、より重要なことは若い世代の教育である。すなわち、PPLは自己利益や生活の利便性ばかり追求することを止め、地上の「街」を改善する仕事に献身する若者、アブラハムがソドムを救うために探していたあの10人（創世記18,16-33参照）のような若者を育成しようとしている。

旧約聖書のエピソードは、何人かの正しい人々がいることを望み、彼らを見つかるまで働くことは無意味ではないと教える。ピオ12世が言うように、

⁴¹ Cf. G. RUGGIERI, *One way: un'esperienza di chiesa a Reggio Emilia*, in: "Prassi", n. 1, febb. 1972, p. 70 ; *Sul Sessantotto*, pp. 113-116.

⁴² Cf. Pane Pace Lavoro, *Per un'azione sociale e politica*, edizioni PPL, Reggio Emilia 2000, p. 1. (コピーライト:PPL). (PPLのウェブサイト panepacelavoro.com も参考)。フランシスコ教皇はより正しい世界社会を作るように絶え間なくアペールを行っている。2015年9月25日、ニューヨークの国際連合でも、物質・精神的な最低限の生活を保証するためにすべての人々に仕事を与えるよう主張した。「この最低限の物質的なレベルに3つの名前があります。『家、仕事、土地』。そして精神的に『精神の自由』と呼ばれます。精神的自由に、宗教の自由、教育の権利や市民としての人権が含まれています」。(Discorso del Santo Padre, New York venerdì 25 settembre 2015, http://w2.vatican.va/content/francesco/it/speeches/2015/september/documents/papa-francesco_20150925_onu-visita.html (2.11.2015)) .

彼らは社会における正しいおきての輝きを理解し、その魅力を感じることが出来る人々である⁴³。

4. 2. 1. 2. 連帯

PPLによる政治・社会的活動は非営利福祉団体 I Sant' Innocenti (見捨てられた児童の会) (ISI)と協力して行われる。ODNの連帯の具体的局面であるISIは1970年代初頭に誕生した。始まりは、高校生、大学生、若い教員たちによる、レッジョ・エミリア郊外の貧しい地域の子どもと青年のための教育活動であった。

1980年、ISIは南イタリアを襲った大地震の復興支援に協力した。1995年にONLUS(非営利福祉団体)として政府に認められた⁴⁴。ISIは「人間個人の十分な進歩と人類全体、共同の進歩のために」⁴⁵、そして社会におけるもっとも傷つきやすい人々、特に児童や青年のためのプロジェクトを実行している。緊急事態においてもISIは働いてきた。ホンジュラスのハリケーンミッチ(1998年)、エル・サルバドル大地震(2000年)、グアテマラの地震(2012年)と洪水(2015年)への援助活動などである。

ISIのイタリア国外における協力活動と連帯は、常に現地NGOを通して働くことを試みる⁴⁶。それは、現地で出会う「善意」の人々とすぐに共に働くよう

⁴³ G. RIVA, *La politica*, Edizioni “Gli Altri”, Reggio Emilia 1995, p. 5. (コピーライト : Centro culturale “Gli Altri”). ピオ12世がこの言葉を述べたのは1942年のクリスマスのラジオメッセージであった (Cf. *Radiomessaggio di Sua Santità Pio XII alla vigilia del Santo Natale*, giovedì 24 dicembre 1942. https://w2.vatican.va/content/pius-xii/it/speeches/1942/documents/hf_p-xii_spe_19421224_radiomessage-christmas.html (2015年12月15日)).

⁴⁴ PPLと同様、ISIにおいても活動とイニシアティブの責任をODNに負わせない。

⁴⁵ パウロ六世回勅「ポプロールム・プログレジオー — 諸民族の進歩推進について・Populorum progressio」(1967年3月26日)5, 上智大学神学部訳, 中央出版社, 1970年, 5頁。

⁴⁶ エル・サルバドルのFundación Divina Providencia (FUNDIPRO), ホンジュラスのAsociación Hondureña para Obras Sociales (AHPOS), ベネズエラのFundación Santa

に呼びかけることである。すなわち、責任のある友情関係を構築し、連帯を目的とした活動を一緒に始める。また外国の支援金と人材に永遠に依存せずに、現地で生まれた業によって徐々に自立するように働く方法である。事実、外国の支援団体はよく「グリンゴス・コン・ラ・プラタ」（金を持っている外国人）と呼ばれ、サンタクロースのような存在として見られてしまう⁴⁷。このようになると状況改善が難しくなる。現地の人々は永久に自立しないまま支援され続けるというメンタリティーが生じるからだ。このような問題を避けるため、ISIのスタッフは1990年代から何人かがその国々に残り、現地の人々の友となって平等の立場で一緒に働いている。その中にはイタリアの市民権を諦め、サルバドル人やメキシコ人としての国籍を選択した者もいる。

ISIのメンバーにとって連帯の業の実現は大変重要で欠かせない活動であるが、それは貧困地域の援助において第1の目的ではない。第1の目的は、具体的な働きを通してキリストに出会った人々が他者に対する兄弟愛を実現することである。イエスは病院や福祉施設を建設していない。彼は人々の心を変えようとした。そして回心した人々がそれらを作ったのである。パウロは、フィレモンに奴隷オネシモを送り戻す時、奴隷としてではなく「愛する兄弟として」扱うように頼む（フィレモン 1,16 参照）。パウロは奴隷制度の廃止を頼まなかったが、むしろ完全に新しい人間関係の誕生を告げる。それはキリストのうち

Ana (FUNDASA), メキシコの Instituto Científico Técnico y Educativo (ICTE), Fundación José Vasconcelos, I.A.P., パレスチナの Association d'Echanges Culturels Hébron-France (AECHEF) は ISI の協力団体である。

ISIの主たる援助活動は以下のものである。

- ・里親制度（主に中米の児童対象）。
- ・エル・サルバドル：サン・サルバドル市のスラム街の児童のための「ミツパチ子どもセンター」（親しみ深いニックネーム「グアルデリア」としても知られている）。
- ・ホンジュラス、メキシコ、グアテマラ：貧困に苦しむ児童への教育支援（移動図書館等）。
- ・メキシコ：ICTE (Instituto Científico Técnico y Educativo) での奨学金制度、設備提供支援。

⁴⁷ ジョヴァンニ・リヴァ「現地の NGO 作り・将来と展望」講演記録、全国 NGO の集い 1999 年 11 月、オリーブジャパン国際開発協力協会、1995 年、p. 8. (コピーライト: オリーブジャパン国際開発協力協会)。

の兄弟愛である。これこそがローマ帝国と共に奴隷制度を廃止したもっとも革命的な態度である。「これは、キリスト教が社会的政治的共生を必ず変化させる新しい人間関係の在り方、本物の社会性を世に運んでいる現象の最初の1つの例である」⁴⁸。言い換えると、主はキリスト者に社会福祉士やボランティアになるように呼びかけてはいない。彼らはすべての行いにおいて、「宇宙と歴史の中心」⁴⁹である復活したキリストが実現した崇高なる業に協力し、キリストのうちにすべての人々が一致できるように働くように招かれており、その行動は神の御国を建設するためになる。「われわれはすでに神の御国を愛し生きている。しかし依然として十字架に付けられている段階の御国である。栄光の御国に決定的に出会えるときまで」⁵⁰。キリスト者は、苦しみや涙、敗北と暴力がない非現実的な地上の楽園を求めない。彼らはこの地上でアガベに基づく人間関係を築く努力によって、完全な神の国に入る日を待ち望みながら、すでに御国を味わい始める。

4. 2. 1. 3. 文化

オペラ・ディ・ナザレは「すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい」(1テサロニケ5,21)というパウロの教えに従い、置かれている環境と関わりに関して、文化的な判断基準としてキリストとその教育的発展的な出来事を中心にする(会則2.4)。

これらの仕事は“Centro studi” (文化会議)によって具体的に進められる。文化会議は、環境、事象、状況、新しい課題や未分析の問題に対する文化的発展を進めるが、個人の想像力や才能を評価しながら、あらゆるものがキリスト

⁴⁸ *Per un'opera*, p. 4.

⁴⁹ 「人間のあがない主」1, 3頁。

⁵⁰ *Per un'opera*, p. 3.

のもとに1つにまとまることを目的とする(エフェソ1,10;会則2.4参照)。文化会議は、その精神を生かし現実に対する賢い判断基準が築かれる場として文化センター誕生を提案する。他と同様にODNに責務を負わせない。流行の概念や行動(消費主義, 気まぐれ, 個人主義など)に影響されずに意見を主張し, 他を評価し, 他者に耳を傾け会話を求める。事実, 他者の声に耳を傾けることはすでに貴重なキリスト教的行いである。

他者と出会い, 会話するためにTonalestate 国際平和文化フォーラムが生まれた。毎年夏の「国際ホリデー」と呼ばれる10日間のイベント中に, 4日間の日程で開かれる。イタリア語で「ホリデー」は「ヴァカンツェ」と言う。語源は「ヴァクウス」, 「空っぽ」という意味である。つまり, 体を休ませ, 頭を空っぽにする。しかしTonalestate 国際平和文化フォーラムの主催者や参加者は, この時期こそ半分破壊されている人間というモザイク, われわれの自我を修復する忙しい時期になる。Tonalestateは「意味深い現実への要求をただの抽象的なレベルにさせないために, 希望のうちに根気を持って働き続ける。希望は, 贈り物が与えられるための闘いである」⁵¹という言葉で第1回目のフォーラムが2001年に開催された。非常に中身の濃い4日間であり, 経済学者, 政治学者, 新聞記者, さまざまな宗教・文化の代表者や福祉活動家, 文学者などが, 多くの人々に出会い, 世界情勢の主たるテーマについて話し合う。もっともスポットが当てられるのは政治経済の重圧を受け声が奪われた人々である。彼らは虐殺, 迫害されている民族の代表者であり, 先進国の圧迫に苦しむ発展途上国の代表者であり, 武装グループやある政府のテロによる被害者である。

Tonalestateは協会の思想を押し付けるものではない。Tonalestateの希望は, 人々が出会い, 向かい合って話し, 人類の共通の神秘的な原点と依存し合う現実を発見し, そこから本物の友情の場を建設する試みを促すことである。この

⁵¹ M. P. AZZALI, *Tonalestate 2001, odissea nell'umano*, in: *Tonalestate duemilauno-duemilaquattordici*, Associazione Tonalestate, 2015, p. 7. (コピーライト: Tonalestate).

友情の場こそが、悪と苦しみに対する無関心、不正と闘う唯一で本物の「抵抗の島」であるからだ⁵²。

4. 3. 清貧

清貧も、教育的に会則の「指示」のセクションに記されている。なぜなら、自己利益と経済的成功に支配されている現代世界において、個人が自分に対する存続的な努力を怠ると、清貧を自然に愛せなくなるからだ。金融と経済が生み出す矛盾に対して、ODN は「コンパニアの経済」の実践を試みる。それは搾取せず、財産の共有を許し、人間の要求に応えることである。すなわち、貯蓄ではなく、分け合い、分かち合いを中心にする経済学である。何も持たないことではなく、イエスを見習い、私有物（精神・知性的な才能も含めて）に依存しないことである⁵³。

私たちにとってイエス・キリストが理想的な模範であることを覚えておきましょう。イエスは家さえ持たないことにしました。ペトロの家に住みに行きました。ついて行きたいと言うある人に、自分は枕にする石でさえ持たないと言いました。一般的に人々は家族をつくることを求めますが、イエスは家族をもつこともしませんでした。それは御父から与えられた役目に対する責任感のためでした。役目とは、人々を癒し、現実の意義を説明し、つまり人生に方向性を与え、心に平和を与えることでした。清貧を通して自由になることを選びました。持っていた富はたった一つだけ、あの

⁵² Cf. Tonalestate 2015: *Fiat voluntas mea, il delirio di onnipotenza*, Associazione Tonalestate, 2015, pp. 3-5. (コピーライト: Tonalestate).

⁵³ Cf. Lettera agli Associati, Opera di Nàzaret, 15 ottobre 2008. 2008年10月17日の国連による「貧困撲滅のための国際デー」をきっかけに、ジョヴァンニが会員に送った手紙である。(コピーライト: ODN).

友人たちでした。[.....] これこそが人間学的な革命です。お金が支配する世界において意識的に清貧を選ぶことです⁵⁴。

金持ちや権力者は、イエス・キリストと共にすでにこの地上で「聖霊によって与えられる義と平和と喜び」(ローマ 14,17) に溢れる神の国を建設する人々のコンパニアに興味がない。彼らにとっては、かえって邪魔者である。ゆえに、ODN の経済とその慈悲の業は「共通の財布」から生まれる。それは会員が自由に決めた金額(定期的、または一時的な寄付金)による財布である。またこれは、キリスト教的分かち合いの意識を育てる方法である。つまり、自分の持ちものすべては共通善のためであり、またいつでも取り上げられる可能性を覚えるためである。

結論

ODN に、カトリック教会のもっとも古い助言「伝統があつて精神は受け継がれる。精神があつて伝統は生きている」⁵⁵が相応しいのではないかと思う。言い換えると、キリスト教の伝統はわれわれよりも先にある。「先立つ明らかな構造があり、参加したい人はそれを尊重し、義務的に受け入れざるをえない」⁵⁶(その参加は個人の自由な意志である)。しかし、同時に伝統がただの自動的な繰り返しになると、その言葉や行いは形式的なものとなり、現代的な意味を失う。そしてキリスト者ではない人々に魅力を与えなくなり、キリスト者の個人的な生活にも影響を与えないというリスクに陥る。そこで、伝統を受け入れるという選択は、聖霊の業としての人間的な友情の場(コンパニア)によって、

⁵⁴ Consiglio Opera di Nàzaret, Marola di Carpineti, 11-14 agosto 2009 (Lezione 13 agosto). (コピーライト: ODN).

⁵⁵ M. カルマノ「カトリック大学の精神とは何か」学講演会レジュメ, 南山大学, 2015 年 10 月 7 日参照。

⁵⁶ 『小さなキリスト教人間学』, 23 頁。

現代的に具体的に形づけられる。友情はその場で本物になり、個人はありのまままで愛される。この意味でキリスト教はまず「宗教」ではないと言える。もちろん内容は形態を必要とし、歴史においてその偶発的で一時的な局面も存在せざるをえない。しかし、キリスト教はまずわれわれの間に宿られた神秘（ヨハネ 1,14 参照）の経験である。この経験、出来事は、今日もキリストという理由によってのみ、一致する人々の交わりを通して繰り返される（初めてイエスの話を聞いた学生が「神が〔キリストを通して〕話したことを確認するには歴史的文献だけで十分なのか。人は体験したことしか理解できない」と書いた）⁵⁷。

この人々は、人生をアガペとして生きようとする。それは十字架につけられているアガペである。人間である悲惨さを背負いながらアガペを生きるからである（私たちにジョヴァンニが繰り返した言葉がある。「あなた方は一番良い人間だから選ばれたわけではではない。むしろ一番賢くなく、頭が固いからだ」）。

会則や種々のドキュメントを分析したが、ODN に特別なカリスマはないことが際立ったと思う。カリスマがあるとすれば、それは聖霊によってジョヴァンニに与えられたものだけであろう。

今日でも、男女信徒の間に多様なカリスマが開花しているのが見られます。これらのカリスマは、個人に与えられるものですが、他の人々と共有することもできます。ですから、人々の間に特別な霊的な親しさを生み出すものとして、尊く生き生きとしたものとして受け継がれ、いつまでも保たれることとなります⁵⁸。

⁵⁷ 南山大学、「キリスト教概論」（秋学期）、2015年12月3日、2年生の感想文より。

⁵⁸ 「信徒の召命と使命」24, 62頁。

ジョヴァンニはこのような「霊的な親しさ」（あるいは「コンパニア」）を、どこでも誰にでも呼び起こすことができる人であった。異存なく無条件でキリストに応えたからだと思う。

コンパニアはアガペの場である。そこはどのような宗教や文化に属している人でも、キリストの眼差で見つめられ、自由に自分の人生の実現（あるいは聖性）を追求することができる。

教会において ODN の新しさは、新たになる古いものであると言える。それゆえに教会においても世界においても本物の「霊の春」を造る生気を与え⁵⁹、パレスチナの道を歩いていたキリストが今日も働き続けることを証明する。ODN も神の賜物として認められた数えきれない信徒会の 1 つに数えてくださった。

⁵⁹ 「新千年期の初めに」 46, 66 頁参照。